

日本の名作名文ハイライト

大びりもつら

樋口一葉

朗読

mokomoko

出所

もつらもつらひつらひつらがたり

<http://www.voiceblog.jp/xizhizi/>

teabreak 編

大づもり 樋口一葉

井戸は車にて綱の長さ十二尋、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゆう／＼と吹ぬきの寒さ、おゝ堪えがたと竈の前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大台にして叱りとばさるゝ婢女の身つらや、はじめ受宿の老媪さまが言葉には御子様がたは男女六人、なれども常住内にお出あそばすは御総領と末お二人、少し御新造は機嫌かいなれど、目色顔色呑みこんで仕舞へば大した事もなく、結句おだてに乗る質なれば、御前の出様一つで半襟半がけ前垂の紐にも事は欠くまじ、御身代は町内第一にて、その代り吝き事も二とは下らねど、よき事には大旦那が甘い方ゆるゑ、少しのほまちは無き事も有るまじ、厭やに成つたら私の所まで端書一枚、こまかき事は入らず、他所の口を探せとならば足は惜しまじ、何れ奉公の秘伝は裏表と言ふて聞かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つで又この人のお世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も無き筈と定めて、かゝる鬼の主をも持つぞかし、目見えの済みて三日の後、七歳になる嬢さま踊りのさらいに午後よりとある、其支度は朝湯にみがき上げてと霜氷る暁、あたゝかき寝床の中より御新造灰吹きをたゝきて、これ／＼と、此詞が目覚しの時計より胸にひびきて、三言とは呼ばれもせず帯より先に襷がけの甲斐／＼しく、井戸端に出れ

ば月かげ流しに残りて、肌を刺すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風呂にて大きからねど、二つの手桶に溢るゝほど汲みて、十三は入れねば成らず、大汗に成りて運びけるうち、輪宝のすがりし曲み齒の水ばき下駄、前鼻緒のゆる／＼に成りて、指を浮かさねば他愛の無きやう成し、その下駄にて重き物を持ちたれば足もと覺束なくて流し元の氷にすべり、あれと言ふ間もなく横にころべば井戸がはにて向ふ臍したゝかに打ちて、可愛や雪はずかしき膚に紫の生々しくなりぬ、手桶をも其処に投出して一つは満足成しが一つは底ぬけに成りけり、此桶の価なにほどか知らねど、身代これが為につぶれるかの様に御新造の額際に青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、其日一日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、此家の品は無代では出来ぬ、主の物とて粗末に思ふたら罰が当るぞえと明け暮れの談義、来る人毎に告げられて若き心には恥かしく、其後は物ごとに念を入れて、遂ひに僊想をせぬやうに成りぬ、世間に下女つかう人も多けれど、山村ほど下女の替る家は有るまじ、月に二人は平常の事、三日四日に帰りしもあれば一夜居て逃出しもあらん、開闢以来を尋ねたらば折る指に彼の内儀さまが袖口おもわるゝ、思へばお峰は辛棒もの、あれに酷く当たれば天罰たちどころに、此後は東京広しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容貌が申分なしだと、男は直きにこれを言ひけり。

秋より只一人の伯父が煩ひて、商売の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居に成しよしは聞けど、六づかしき主を持つ身の給金を先きに貰へば此身は売りたるも同じ事、見舞にと言ふ事も成らねば心ならねど、お使ひ先の一寸の間とても時計を目当にして幾足幾町と其しらべの苦るしき、馳せ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛棒を水泡にして、お暇ともならば弥々病人の伯父に心配をかけ、瘦世帯に一日の厄介も気の毒なり、其内にはと手紙ばかりを遣りて、身は此処に心ならずも日を送りける。師走の月は世間一体物せわしき中を、こと更に選らみて綾羅をかざり、一昨日出そろいしと聞く某の芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十五日、珍らしく家内中との触れに成けり、此お供を嬉しがるは平常のこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違ひたらば夫れまでとして遊びの代りのお暇を願ひしに流石は日頃の勤めぶりもあり、一日すぎての次の日、早く行きて早く帰れと、さりとは気まゝの仰せに有難うぞんじますと言ひしは覚えで、頓ては車の上に小石川はまだかまだかと鈍かしがりぬ。

初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、正直安兵衛とて神は此頭に宿り給ふべき大薬缶の額ぎはぴか／＼として、これを目印に田町より菊坂あたりへかけて、茄子大根の御用をもつとめ

ける、薄元手を折かへすなれば、折から直の安うて嵩のある物より外は棹なき舟に乗合の胡瓜、苞に松茸の初物などは持たで、八百安が物は何時も帳面につけた様なと笑はるれど、愛顧は有がたきもの、曲りなりにも親子三人の口をぬらして、三之助とて八歳になるを五厘学校に通はするほどの義務もしけれど、世の秋つらし九月の末、俄かに風が身にしむといふ朝、神田に買出して荷を我が家までかつぎ入れると其まゝ、発熱につゞいて骨病みの出しやら、三月ごしの今日まで商ひは更なる事、段々に喰べへらして天秤まで売る仕義になれば、表店の活計たちがたく、月五十銭の裏屋に人目の恥を厭ふべき身ならず、又時節が有らばとて引越しも無惨や車に乗するは病人ばかり、片手に足らぬ荷をからげて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峰は車より下りて※処此処と尋ぬるうち、凧紙風船などを軒につるして、子供を集めたる駄菓子やの門に、もし三之助の交じりてかと覗けど、影も見えぬに落胆して思はず往来を見れば、我が居るよりは向ひのがはを瘦ぎすの子供が薬瓶もちて行く後姿、三之助よりは丈も高く余り瘦せたる子と思へど、様子の似たるにつか／＼と駆け寄りて顔をのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちゃんでも有ったか、さても好い処でと伴なはれて行くに、酒やと芋やの奥深く、溝板がた／＼と薄くらき裏に入れば、三之助は先へ駆けて、父さん、母さん、姉さんを連れて帰ったと門口より呼び立てぬ。